

第3回京都大学医療技術短期大学部健康科学集談会抄録

Abstracts of the Third Health Science Meeting in the College of Medical
Technology, Kyoto University

日 時：昭和63年12月26日（金）13:00～18:00

場 所：京都大学医療技術短期大学部会議室

1. 動揺性肩関節患者の棘上筋棘下筋筋力について

黒木裕士，角南昌三，鈴木康三，
森永敏博，濱 弘道¹⁾，岩崎廉平²⁾
（京都大学医療技術短期大学部理学療法学科¹⁾，京都大学医学部整形外科²⁾）

〔目的〕 いわゆる動揺性肩関節患者（loose shoulder）の棘上筋ならびに棘下筋の筋力を測定し、これを健常者の結果と比較することによって動揺性肩関節の病態解明を行った。

〔対象と方法〕 京大病院理学療法部を受診した動揺性肩関節患者（LS 群）女性6名10関節ならびに健常者（C群）女性28名56関節を対象とした。LS 群の身長・体重・年齢の平均は、それぞれ158.3 cm, 48.3 kg, 21.3歳（16～26歳），C群では157.2 cm, 52.7 kg, 20.2歳（19～22歳）であった。

LS 群とC群に対して、Myometer（英国 Penny & Giles 社製）を用いて棘上筋ならびに棘下筋の等尺性筋力を反復測定し、test-retest 法で信頼性を確認したうえで両群の測定結果を t 検定を用いて比較した。

棘上筋力測定は、F. Jobe (1983) の述べた supraspinatus test 肢位で行い、棘下筋筋力測定は、濱ら (1986) の述べた肢位で実施した。
〔結果〕 1. LS 群とC群の棘上筋筋力測定結果は、それぞれ 7.0 ± 1.6 kg, 15.0 ± 2.8 kg（平均値±標準偏差）であり、LS 群はC群の約47

%であった ($P < 0.01$)。2. LS 群とC群の棘下筋筋力測定結果は、それぞれ 7.0 ± 1.0 kg, 10.5 ± 1.9 kg であり、LS 群はC群の約67%であった ($P < 0.01$)。

〔考察〕 遠藤 (1977) は、動揺性肩関節患者には肩甲骨の外転・外旋筋力の低下があると推測し、一方、信原 (1978) は、徒手筋力検査法では筋力は正常であると報告している。本研究では肩関節の運動に作用する棘上筋および棘下筋に明らかな測定値低下を認めた。この低下は、①両筋肉そのものの筋力低下、②肩甲骨の外転・外旋筋力の低下、③上腕骨頭の slipping, ④ gleno-humeral rhythm の異常、⑤肩関節の疼痛や不快感、⑥肩甲骨の内転・下制筋力すなわち肩甲骨固定筋力の低下、などの要因のうちいずれかあるいはいくつかによって生じているものと推測された。

2. 無拘束ネコにおける小脳脳波の記録と解析

長谷龍太郎¹⁾，下野登士男²⁾，北浦大作，
西口芳伯³⁾

（京都大学医療技術短期大学部作業療法学科¹⁾，
同教養科²⁾，京都大学医学部第1生理³⁾）

〔目的〕 従来、脳波学では、小脳には脳波と呼ぶべき電気現象が発生していないものとして、それを対象外としてきた。我々は軽麻酔下のネコを用いた急性実験において、特徴的な小脳脳波を記録し、その発生機構を明らかにしてきた